

【渴いている者は誰でも】

ヨハネ福音書7章32～39節
16.05.08

▼以前からお話ししていますが、ヨハネ福音書を読む内に、気付いたことがあります。一度気が付くと、どうしてもそのことに拘ってしまいます。決して偶然ではない、特別な意味が込められていると考えるからです。

1～7章まで、全ての章に、連続して水にまつわる話が登場します。これが8章以降はパタリと途絶えます。無理やりこじつければ21章になって、大漁の奇蹟が起こり、これは湖での出来事ですから、水に無関係ではありません。しかし、1～7章までの記事とは、根本的な相違があります。

▼水と関係する出来事を概観します。

1章、バプテスマのヨハネが登場します。特に31節以下。

『31:わたしはこの方を知らなかった。しかし、
この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。』
32:そしてヨハネは証した。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、
この方の上にとどまるのを見た。

33:わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるために
わたしをお遣わしになった方が、

『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、
その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。』
ここで、水と聖霊とが関連づけられています。

▼2章、カナの婚宴の物語、水が葡萄酒に変えられる話です。お酒はアルコールスピリッツです。アルコールに変えられたというよりも、スピリットが加えられたと解釈出来ます。スピリット、普通には精神と訳すでしょうか。ホーリースピリットは聖霊です。

カナの婚宴の物語は、水が葡萄酒に変えられる話であり、無価値なものが、価値あるものに変えられた話です。聖霊が働いた物語です。

人間もそうです。神さまの御業に用いられる時に、無価値なものが、価値あるものに変えられます。それが聖霊の働きということでしょう。

ここでも、水と聖霊とが結び付けて語られているのです。

▼3章、学者ニコデモとイエスさまの対話が載っています。特に5節。

『イエスはお答えになった。「はっきりしておく。

だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。

6:肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。』

ここでも、むしろここでこそ、水と聖霊とが結び付けて語られています。

新たに生まれるということは、作り替えられると言い換えることができます。

その点で、1章の洗礼、2章の水が葡萄酒に変えられる話とも、大分重なります。

▼4章、サマリア人の女とイエスさまの対話があります。スカルの井戸、そこからわき出る水を巡る話です。ここには7章と直接に結びつく言葉が現れます。

13～15節。

『13:イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。

14:しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。

わたしが与える水はその人の内で泉となり、
永遠の命に至る水がわき出る。』

15:女は言った。「主よ、渴くことがないように、

また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。』
ここでも、水と聖霊の話です。

▼何度飲んでも未だ渴くのは、満たされないのは何故でしょうか。霊が降されていないからでしょう。むしろ、霊を受け止めていないからでしょう。

こう言うと、裁きに聞こえるかも知れませんが、優しく言い換えますと、他のものは手に入らなくとも、聖霊を受け入れるならば、満足出来るということにもなります。お金がなくとも、地位がなくとも、健康がなくとも、何がなくとも、聖霊を受けるならば、心が平和になれるのです。

自分の生活に、或いは信仰生活に、不満を抱くものは、何を下さい、かにを下さい、と祈る前に、聖霊を下さいと祈るべきでしょう。

他のものは手に入らなくとも、霊を受け入れるならば、満足出来るということにもなります。何がなくとも、聖霊を受けるならば、心が平和になれるのです。

▼5章、ベトザタ池畔の癒しです。泉の水が動き、その水に入った者は癒やされるという話です。ここには直截的に聖霊のことには触れていません。しかし、水によって変えられる、むしろ、ここでは水に依らずとも、主の御言葉をいただければ、癒やされる、変えられるということで、矢張り共通点があります。

聖霊は、主の御言葉によって与えられます。

5章24節。

『はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている』

5章39節。

『あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ』

聖霊は、主の御言葉によって与えられます。また、聖霊によって、御言葉が聞こえるようになります。

聖書を読んでいると、靈感ということを考えさせられます。理屈を超えて、御言葉の意味が、ふと分かることがあります。理解出来なかった言葉が分かり、聞こえなかった言葉が、突然に聞こえてくる場合があります。

▼6章には、5千人の給食と、イエスさまが湖の上を歩かれる話が描かれています。

そして、27節以下。

『朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、

永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。

これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。

父である神が、人の子を認証されたからである。』

28:そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、

29:イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。』

更に、55～56節。

『わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。

56:わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、

いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる』

ここには、4章との深い関連があります。渴くことのない水、それとイエスさまの血とが重ねられています。

本当に満たされるためには、イエスさまの十字架によるしかありません。

5章とも深い関連があります。

▼水と聖霊が重ねられて語られるのは、7章が最後です。ここがまとめです。ここで水とは全く、聖霊のことだと分かります。

37節。

『祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい』

最近、新しい聖書の翻訳のパイロット版が出ました。それを見ますと、『渴いている人はだれでも』という翻訳は全く同じですが、この箇所には附記があります。…直訳『誰か渴いているなら』。同じことですが、より鮮明な感じはします。

▼イザヤ55章1節。この箇所を下敷きとしていることは間違いありません。

『渴きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。

銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。

来て、銀を払うことなく穀物を求め

働を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。』

当時世界最大の都バビロンで、一旗揚げた者は、片田舎に過ぎない、それどころか、荒廃したイスラエルに、敢えて戻りたいとは思いません。

未だ若くて、成功の可能性を残している者も帰りたくはありません。そも、若者は、バビロンで生まれた第2世代、第3世代です。

イスラエルを知らないのです。郷愁さえ存在しないのです。

帰ろうとするのは、一目ふるさとの山を見て死にたいと考える年寄、そして、仕事も家もない、バビロンでは生活の成り立たない者です。

勿論、一握りの、真に信仰に生き、神さまとの約束を信じて、エルサレムを目指す、イザヤの弟子たちがいたことでしょう。

▼イザヤ40章3～4節、

『呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。

4:谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ』

マタイ福音書にも引用される預言です。

ユダヤの民が捕らえられているバビロンから、故郷イスラエルまでの道筋には、砂漠が横たわり、多くの山と谷とが道を塞いでいます。

その谷は、高くせられとありますが、むしろ、谷自らが背伸びをして高くなり、主が歩む妨げになるまいとするという意味合いであります。また、山は、低くせられとありますが、むしろ、山は自らが身を屈めて背を低くし、主の歩むのに妨げになるまいとするという意味合いです。

新共同訳聖書は、そのような意味を踏まえて訳しています。勿論、この箇所全体の全体が、所謂、終末論的、黙示的に表現されたものです。

▼しかし、その一方で、この預言は、極めて現実的なことを踏まえているのではないのでしょうか。

つまり、イザヤの群れは、足腰が弱り、杖をつき、足を引き摺っている群れだったのではないのでしょうか。

▼55章2節。

『なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い／飢えを満たさぬもののために労するのか。わたしに聞き従えば／良いものを食べることができる。あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。』

これは客観的に見て、決して裕福な人々への語りかけではありません。

イザヤの群れは、こうした貧しい人々の群れだったのです。

しかし、これは、勿論、食料や生活のことだけを言っているではありません。食料や生活のことは、あくまでも比喩です。

真の救いを求めて生きるということが、重ねられているのです。

食料や生活のことだったならば、バビロンの方が豊かでしょう。しかし、バビロンの富は、本当には人々を満足させることはない、真に豊かになることはない、と、説いているのです。

そして以上イザヤと彼が率いるユダヤの人々のことは、イエスさまとこれに従う人々に、全く当て嵌まるのです。

イザヤに率いられたユダヤ人が故郷を目指すように、イエスさまに率いられた群れは、神の国を目指すのです。

▼ヨハネ福音書に戻ります。38節。

『わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、

その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる』

ヨハネ福音書4章との関連が濃いと思います。

つまり、礼拝との関連です。

ヨハネ福音書4章20節以下。長い引用です。

『20:わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。』

21:イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。

22:あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。

23:しかし、まことの礼拝をする者たちが、

霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。

なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。

24:神は霊である。だから、神を礼拝する者は、

霊と真理をもって礼拝しなければならない。』

▼ヨハネ福音書4章でも7章でも、結局は礼拝のことです。それが、39節につながります。

『イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである。』

ヨハネ福音書のことですから、使徒言行録の聖霊降臨と直結しないかもしれませんが。しかし、私たちの頭の中では、重なります。それは許されると思います。

次週はペンテコステの礼拝になります。ペンテコステとは、『信じる人々が受けようとしている“霊”』の物語です。

▼39節後半。

『イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、

“霊”がまだ降っていなかったからである。』

矢張り、十字架の出来事、復活、そしてペンテコステを待つのです。